

競技力向上に向けた取り組みと課題：他団体との連携の現状

「はじめに」

富山県では、平成6年度全国高等学校総合体育大会および平成12年第55回国民体育大会にむけて、競技選手の競技力向上・体力増強を目的とした対策が行われ、各大会では大きな成果を上げてきた。そして現在、2020年の東京オリンピックを見据え、本県競技力の向上を目指し、監督、コーチ、スポーツドクター等の連携のもとスポーツ医・科学サポートを積極的に展開し、全国や世界の檜舞台で活躍できるアスリート育成のために一貫指導体制の構築を目指している。

「研究調査の目的」

本県においてボクシング競技はマイナー競技であり、競技人口、競技役員数共に少なく、強化と運営を同時進行しなければいけない現状である。この現状を少しでも改善できないものかと考え、富山県高等学校体育連盟（以下、「富山県高体連」と略す）及び公益財団法人富山県体育協会（以下、「富山県体育協会」と略す）が実施している強化事業について調査し、有効活用する方法を考察することとした。

本調査では、特に「未来のアスリート発掘事業」、「元気とやまスポーツ道場」、「TOYAMA アスリートマルチサポート事業」の内容と成果をふまえながら長期的な展望のもとに高校側と富山県・富山県体育協会・各競技団体、ジュニアとの関わり方や課題について調査・研究し、今後の高校生の競技力の向上につながる取り組みについて見つけていきたい。

「研究方法」

1. 強化事業についての調査
2. 各専門部委員長へのアンケート
 - (1) 強化事業の認知度について
 - (2) 他団体との連携について

「調査結果」・・・図1 本県における強化事業体制 参照

1. ①競技スポーツ振興事業（回数及び人数については、平成27年度実績）

小中学生を対象に、スポーツ教室、記録会及び練習会を実施し、競技スポーツに対する興味・関心を高めることにより、競技スポーツ人口の拡大を図る。

- ・記録練習会 33競技 70回 13,200名
- ・教室 20競技 25回 8,283名

- ②未来のアスリート発掘事業

スポーツ能力に優れた児童を見出し、将来のスポーツ界を担う人勢育成をサポート（小学5・6年生）

③元気とやまスポーツ道場

中学・高校の有望な逸材を発掘し、県内の拠点スポーツ施設で、長期的な展望のもとに育成強化を図る。

④中学・高校運動部スーパーコーチ派遣事業

全国優勝等の指導経験のある指導者を中学・高校へ派遣し、顧問の指導力及び部活動運営を支援（バレーボール、柔道、ボート、ホッケー、陸上競技、スキー：23校、930回派遣）

⑤TOYAMA アスリートマルチサポート事業

選手の発育・発達段階に応じた医科学的サポートを実施。カテゴリー毎にサポート選手を指定（17競技20種目：計796名）し、メディカルチェック（問診、血液検査、スポーツ診断）や体力測定、トレーニング指導、食事調査、スポーツメンタルサポート、大会や合宿へのスタッフ派遣。

2. ①「未来のアスリート発掘事業」の認知度（図2）

小学校5年生対象に全小学校から一般公募や各競技団体からの推薦もあり広く告知されているため、ほとんどの競技で認知されていることが分かった。

②「元気とやまスポーツ道場」の認知度（図3）

中学・高校生対象の「元気とやまスポーツ道場」については、県体育協会から各競技団体に告知し、希望競技団体からの申請のため、34競技のうち、約半分の競技しか実施されていない。そのこともあり、認知度は「未来のアスリート発掘事業」よりも低いことが分かった。

③「元気とやまスポーツ道場」での高体連専門部の関わり

この事業に関してはほとんどの競技が競技団体主催のため、関わっている専門部は少数であった。具体的な活動としては中学生との合同練習や練習試合、高校の指導者による中学生への講習会、高校から競技を始める選手への基本指導などであった。

④高体連専門部と他団体との連携について（図5）

他の団体との連携については、ブロック大会出場者や県選抜選手の強化として中・高合同の強化練習会や国体の強化事業として関わっているものなど、各競技が独自で強化されていることが多かった。

「成果と課題」

1.他団体との連携

アンケート結果を分析すると、他団体との連携の強さや関わりの多さが成績に反映していると思われる。その典型的な例がハンドボールやホッケーで、これらの競技は地域スポーツとして古くから根付いており、中体連、県協会、地域が連携しながら普及・強化活動を行っていることが安定した競技成績につながっていると考える。また、

バレーボールでも同様の動きがあり、特に中体連や県協会と連携を図りながら継続的に強化事業を行った結果、その成果が現れてきた。こうした成功例を参考に高体連専門部が他団体との連携をより強固にし、継続的な指導体制が構築されれば、さらなる競技力の向上に繋がると考える。

2.富山県体育協会との連携

富山県体育協会が中心となって行われている強化事業での成果にも注目していきたい。「未来のアスリート発掘事業」は2015年度で丸10年が経った。富山県体育協会が実施した1～3期生へのアンケート結果（回答率93%）によると、活動内容について、88%の修了生がその後の活動に役立ったと答えており、全国大会出場歴が39%（うち全国優勝者8名）、主将経験者が54%と現在も活躍していることが分かった。さらに進路については、指導者を考えている選手が20%いることから「次世代への繋がり」や「後継者育成」につながるとして、大いに期待される。

これ以外の成果として、近年の全国大会入賞者（夏季大会のみ）の数を見てみると、平成27年度では12競技18種目（延べ人数74人）であったのが、平成28年度では12競技33種目（延べ人数102人）うち全国優勝が3競技と全ての面で前年度アップとなった。その要因として、「TOYAMA アスリートマルチサポート事業」の実施が挙げられる。この事業で、トレーナーによる多方面からのサポートを受けたことや役割の細分化によって、その成果につながったと考えられる。

調査・分析する中で現在の強化事業における課題点もいくつか見られた。「未来のアスリート発掘事業」で成績上位の優秀な児童が中学校に指導者がいなかったために、その後、本県代表選手にすななわいていない事例や選手が県外に流出した事例もあった。

今後の課題として、アンケート結果にもあったように富山県体育協会の強化事業の認知度がまだ高いとは言えない。そこで、強化事業の周知を図り、より多くのアスリートを発掘できる環境を作ることが必要であると考え。また、これらの事業に関わった選手の情報を共有することで、継続的な育成を行うことができると考える。加えて、サポートを受けているものの、トレーナーの数が不足し、新規参入できない現状もある。このような中学校以降の育成・強化にむけた環境を整備することが更なる強化に繋がると考える。

柔道やホッケー、ハンドボールのような、昔から地域が競技の普及や強化に密着に関わって成果を上げてきた形のスタイルが富山県の伝統であり、ここで挙げてきた強化事業を有効に活用し、他団体との連携を深めていくことが新たな試みであるとするならば、このような「富山県の伝統」と「新たな試み」の融合を高体連専門部が主となり、進めていくことが今後の競技力向上につながると考える。このようなことから、高体連専門部が果たす役割はますます重要になってくる。

小5	小6	中学	高校	一般
競技スポーツ振興事業				
アスリート発掘事業		元気とやまスポーツ道場		
		スーパーコーチ派遣事業		
マルチサポート事業				
				強化指定事業

図1 本県における強化事業体制

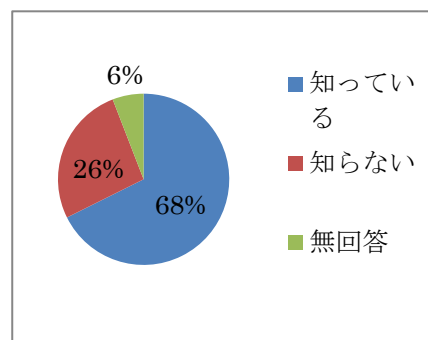
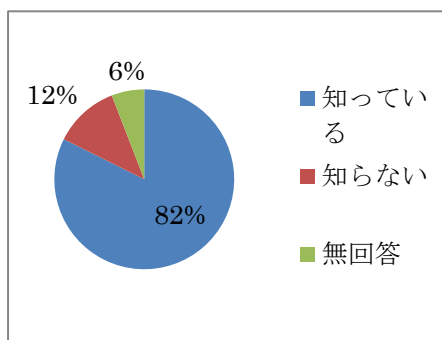


図2 「未来のアスリート発掘事業」の認知度 図3 「元気とやまスポーツ道場」の認知度

富山県高体連専門部 他団体との連携			
部名	①中体連との連携	③県協会との連携	⑤地域との連携
ハンドボール	県内トップチームは、中学校と合同練習や練習試合などを年に10回程度行っている。中学生の県選抜チームJOCチームと、全国大会に向けての強化に、練習会場として高校を使用し、合同練習を行っている。	国体強化を県協会主導で行っている。	小学生の全国レベルの「ちびっこハンドボールフェスティバル」や「春の中学生ハンドボール選手権大会」に、地元の高校などが補助役員として協力している。中学生強化には、常に高校生が協力している。
ホッケー	中学生全国11人制大会に向けての合同強化練習会を行っている。	高校の大会運営等は県協会の協力なしで運営できない。高体連専門委員長と県協会事務局長を兼務しているので、ほとんど実務的なことを行っている。	典型的な地域のスポーツであり、「ホッケーのまちおやべ」と言われている。市の多くのバックアップをいただいている。設備についても、全て市営である。
バレーボール	北信越大会(8月)に出場するチームと中体連で強化練習会を行っている。	県の競技者育成プログラムの中で、9月より毎週、中学選抜チームと合同練習・練習試合を行っている。また、土曜日・日曜日にも練習試合等を行っている。	地元の協会と高校が連携して、合同練習会等を行っている。
ボート	選手強化への会議開催や指導者の交流をしている。	強化練習会に中高の指導者が連携して指導にあたる。	富山市開催の神通峡レガッタ・運河祭りへ協力している。

図4 高体連専門部と他団体との連携